

不定期連載

ラインの向こう側

～ 留置所体験記 その3 ～

茶ーリトル(ペンネーム)

前回のあらすじ

友達2人と服を盗み逮捕された。僕は20歳で、あとは未成年。僕だけ違う場所に連れて行かれ、留置所生活が始まった。

留置生活1日目に少し広めの檻を移動し、セカンドステージへ。そこには、第1印象、「すっごくおっかない」ゆうじさんを含め3人が既に入っていた。ゆうじさんにビビりつつ挨拶。返ってきた言葉は「おう、よろしくな」。その時、僕の中ではゆうじさんはもう「怖い人」ではなかった。

セカンドステージのメンバー：

僕、ゆうじさん、連さん、にんにんさん。

その日は、いっぱい話したな。具体的に何を話したかなんてよく覚えちゃいないけどさ、とにかくいっぱい話したよ。それに漫画も読んだ。どうやら留置場では、さしいれってのが可能らしくてさ、ゆうじさんには本やら雑誌やら漫画やらのさしいれがいっぱいあったんだ。「読んでいいぞ」って言ってくれたから、遠慮なく読ませてもらったんだ。僕は、次の日に東京地検に行くって事ですげえ不安だったんだけど、そんな気持ちもすぐに和らいだね、ホント。

昼飯ってのがパンでさ、2つなんだけど、ここで裏わざ！ これもゆうじさんに教えてもらったんだけどね、1つ食わずにとっとくんだ。そいつをばれない様に上着とかに隠しておく。で、夜、消灯した後にこっそりそいつをいただく。パンかじりながらちっちゃい声で話しをしたりするんだってさ。まるで修学旅行じゃんか?! ここにいる人達はみんなルールをはみ出た人達なわけさ。僕を含めてね。ラインを越えてやって来てしまったこの場所でもこんな事するなんて笑えちゃったよ。大した事じゃないんだけどさ。笑えたし、少し元気になれる。

翌日、僕は朝飯を終え、みんなより早く運動(たばこ)をした。なんでかって言うとね、そう、今日は東京地検に搬送される日だからさ。そうゆう流れになってるんだ。ここには時計なんてないから時間は分からないけど、けっこう早くから行くんだ。時間はなくてあるのは朝って空間だけ。看守のおまわりさんに聞けば時間は教えてくれるんだけど、そんなのは無意味なんだ全く。なかなかいいもんさ、時間って感覚や概念がないってのも。

東京地検へ出発。僕の他に3人ぐらいいたかな。実はその中に、一緒につかまった仲間がいたんだ！ 捕まって以来の2日ぶりのご対面。お互い顔合わせたら笑っちゃった！ こんな状況下でもね！ こいつは「あきら」って名前なんだけど、実はこの男こそが、結構前に話した電子レンジ窃盗ボーイなのだ！ そして、僕と一緒に暮らしていた奴なのだ！ 僕の友達だ。監獄でも戦場でもきつと友達だ。数字の世界には存在しない友達だ。つまり、心に広がる何かだ。

つづく・・・